

# 秋吉台における人文生態の推移

浜 田 清 吉

## I はじめに

秋吉台は本州西端部長門山地の中央部にある古生層の石灰岩台地である。この特色あるカルスト地形<sup>1)</sup>は日本を代表し、豊富な化石群はわが国近代地質学発祥の地たらしめ、多数の石灰洞もまた日本の洞窟学発達に大きな寄与をしている。なお、古生物学・人類学・考古学などからの期待も大きい。かくて、秋吉石灰岩台地は、総合的な一大天然記念物の実をもち、東秋吉台はその主要部が広域の特別天然記念物、それをとりまく地域が独立の国定公園に指定されている。

このような秋吉台は、わが国におけるカルスト地形研究の典型的地域であるのはもちろん、地域性の究明をめざす地理学にとっても貴重な個人的地域である。それゆえ筆者も、秋吉台を中心とするカルスト研究を志して既に久しい。1940年、予察的な概報「秋吉台の地理的研究」<sup>2)</sup>で、そのカルスト研究の歴史を省み、カルスト地形とカルスト文化景観の全野にわたって記載を試みた。カルスト文化景観は、カルスト自然への人間の適応という形でとらえ、耕作・鉱業・交通・集落および観光の分野にわけて取扱っている。その後地形を中心に研究を進める中で、考古学的探究も必要となり、人間居住の上限や開発過程にも関心を深めてきた。他面、太平洋戦争を転機とした社会経済事情の変化は、秋吉台のカルスト文化景観、人文生態を大きく変容させたのである。それとともに考古学・人類学・古生物学・洞窟学などからの研究の進展によって、先史時代の自然環境や人間居住の上限などがある程度推定できるようになってき

---

注 1) カルストはユーゴスラビアのアドリア海沿岸の地名 (KARST) に由来し、カルスト地形とは石灰岩地などに特有の溶食地形をいう。日本でいってみれば「秋吉地形」といったような表現である。

2) 浜田清吉「秋吉台の地理的研究」『秋吉台の研究』山口県女子師範学校 1940年 4月 1—99ページ。

た。ただ秋吉台における原史時代の空白は大きく、上代から中世もなお暗黒に近い状態にとどまっている。しかしながら今の段階で、半世紀近い秋吉台カルストの研究を省み、不十分ながら秋吉台における人間生活の変遷推移のあらましを、カルスト自然に対する人間の適応という立場でとりあげ、「秋吉台における人文生態の推移」と題して論述を試みることにした。

## II 環境としての秋吉台

秋吉台は古生代のサンゴ礁に由来し、幾多の地殻変動や侵食の結果形成された標高およそ200～400mの、「台山」の名にふさわしい高原である。面積はおよそ130km<sup>2</sup>、平行四辺形に近い地域形で、1000mに及んだと推定された層厚も今は侵食されて約500mながら、日本最大の連続的石灰岩体とみなされている。地上部は厚東川によって東西に二分され、東部北辺には中台（南台）・真名ヶ岳台・佐山台・猪出台などが分立し、台地の間や縁辺にはポリエ (Polje) とよばれる特殊な平野が形成されている。

秋吉石灰岩は灰白色を示し、ちみつで固く純度も高く、ほとんど他の岩層をまじえていない。フズリナ・サンゴ・ウミユリなどの化石が豊富であるが、一部は大理石に変成されているし、接触鉱床も生成している。また、南部を除く大部分は地層が逆転しており、断層や裂かも多い。石灰岩は炭酸を含んだ雨水や地下水、根酸などの酸に溶けやすく、化学的侵食が物理的侵食に優越する。従って溶食を主とした凹地形や凸地形、洞窟地形をつくり、地表流はほとんどなく、地下流が顕著である。土壌も石灰岩地特有のテラロッサが成立し、地味はやせており、時に前輪廻からの砂礫層や残留鉱床を保存し、火山灰層も一部には観察できる。また、台上の長者ヶ森や台腹の急斜面の秋芳洞口附近などには、原始植生に近い照葉樹林も残っているが、人工による草原と樹林地がほとんどの台面を蔽っており、<sup>1)</sup> 固有の大形の動物にとぼしい。ただ、人類時代が、少くとも洪積世にさかのぼることを思えば、日本列島が海水準変化や地盤

注1) 塩見隆行・中村 久「秋吉台の現存植生図」『秋吉台科学博物館報告』 第16号  
1981年3月

1982年6月 浜田清吉：秋吉台における人文生態の推移

運動によって、大陸の一部となったり島となったりした古地理や、海水準変化をもたらした氷期・間氷期といった気候変化も問題となってくる。秋吉台においても、先史時代の環境としては、この種の古地理・古気候・古生物の考慮が必要である。しかも、原史・有史時代においてさえ、小さいながら気候変化と海水準変化、従って生物の変化、地形や水理の変化のあったことを、人間生活の環境として忘れてはならない。以上が先学の諸研究をふまえての、環境としての秋吉台の概要である。

### Ⅲ 先・原史時代

秋吉台カルストの研究上、微地形や土壌・植生などへの人間的刻印の上限を求め、縄文式土器をはじめ各種の土器や石器類を発見して報告したのは1953年の『秋吉台カルスト』の特説「秋吉台の遺物発見地とその遺物」<sup>1)</sup>である。同じカルストの姉妹地域北九州の平尾台において、全く同様の意図で積極的に縄文式土器や石器その他を発見<sup>2)</sup>し得た経験をふまえての調査の結果であった。両者とも先史人の生活場所を推定しての表面採集による調査であったが、初め

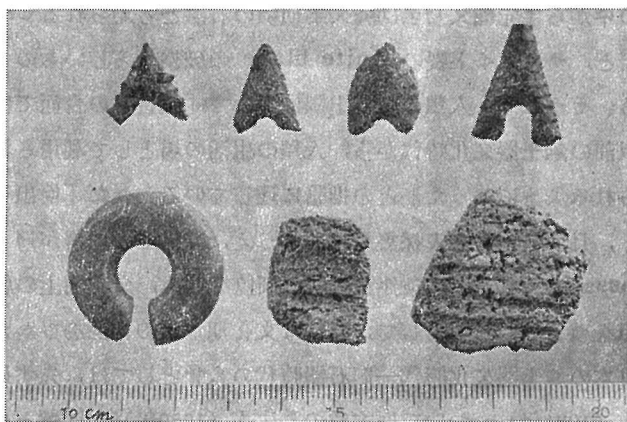


写真1 秋吉台の縄文式文化遺物 石鏃と耳飾は1952年、土器は'56年採集。

注 1) 浜田清吉『秋吉台カルスト』秋吉村 1953年。

2) 浜田清吉・小野忠熙「平尾台の遺物発見地とその遺物」『平尾台カルスト』第1集 小倉市 1952年11月 25—43ページ。

ての縄文式や弥生式の土器発見として考古学界から注目されたのであった。

その後1956年、緊急に成立した秋吉台学術調査団の考古学班（小野忠熙班長）が、第2次踏査というべき考古地理学的調査を行い、新たな遺物・遺跡の発見を重ね、「考古学上より観た秋吉台」<sup>3)</sup>を報告した。人類の生活の場が先縄文の無土器文化時代にまでさかのぼると推定し、範囲もひろがった地域で新たな遺跡の数々が確認されたのである。そうして、調査結果にもとづく考察と推定を行った上、爾後の調査研究が期待されているが、後続の調査は行われないうまま今日にいたっている。従って小野忠熙によるこの報告は今なお貴重であるし、筆者の調査の発展的調査の結果でもあるから、特に「小野報文」の略称でしばしば引用したいと思う。

## 1. 先史時代

「小野報文」によると、北馬コロビの「End-scaper の一種と見られるもの」をはじめ、下麻島・小路久保などの地域を含めて、先縄文の無土器文化に属すると推測できる16箇の遺物を採集し、さらに筆者調査における船ヶ窪出土の疑問品の中から「先縄文乃至は縄文早期頃の石器と考えられる Chopper 様石器を1箇と、サヌカイト製の Knife blade の破損品らしいもの1箇」を見出している。そうして、人類の居住上限について「秋吉台の台面では、縄文式文化時代以前の無土器文化時代から、人類の生活の場として利用されていたことが考えられるようになった」との推論に達している。ただ「検出した石器類の量が少く、且つ何れも地表採集品であるうえ、発見地の地層が層序のない Terra-rossa であるという条件が資料の価値を低め、文化期上の所属を決める上に難点を残している」として、詳細な文化期などの推論をひかえている。

さて、日本の無土器文化時代―旧石器時代の人骨としては、先ず最初に兵庫県明石人（1931年）、ついで栃木県の葛生人（1950年）が問題となった。そうして、愛知県の牛川人（1957年）、静岡県の三ヶ日人（1958年）・浜北人（1961年）、ついに決定的な意味をもった沖縄県の港川人（1971年）と洪積人

---

3) 小野忠熙「考古学上より観た秋吉台」、山口県教育委員会『秋吉台』1957年3月。

が発見されるにいたった。<sup>4)</sup> なお、これらの多くは石灰石採掘場のとざされた洞窟や裂かの中から発見されたものである。秋吉台においても、伊佐セメントの採石所(1954・68年)、伊佐の栗山ノ穴(1965年)などから洪積人骨の疑いのある資料が発見されたことを岡藤五郎は『秋吉台および周辺の化石図集』で報告している。<sup>5)</sup> また長谷川善和も「秋吉台の石灰洞と哺乳類化石」の中で「宇部興産からのマグロの脊椎骨と人骨は産状・時代などにつき若干問題が残されている」と書いている。<sup>6)</sup>

なお、岡藤は上記図集の91ページ以降で、洪積世の哺乳類化石産地を石灰岩採石所9、石灰洞12をあげ、シカマトガリネズミ、ニッポンモグラジネズミといった小型哺乳類の標準化石、ステゴドン・ナウマン・アオモリ象などの旧象、トラ・サイ・ヒグマさらに、オオツノジカ・ニッポンムカシジカなど多量多量の大型哺乳類の化石を図説している。長谷川の上述論文にも「伊佐地域の台上から周口店動物群に比較されるものが何種類か発見されたが、これにナウマン象*Palaeoloxodon navmanii* (MAKIYAMA) が含まれる。大勢は周口店期に対比することは大局的に問題はないであろう」とし、ステゴドン象とナウマン象化石の混在を論じたあと「単的にいえば秋吉地方の台上に見られる動物遺骸群集の時代は更新世中期といえよう。すなわち、秋吉カルスト台地の形成は更新世中期のものであることを示唆している」とも述べるに至っている。

かくして、北京原人に近い人骨の発見さえ期待できる秋吉台であるが、現時点においては、「小野報文」の記載のように、先縄文時代すなわち旧石器時代には、北馬コロビ・船ヶ窪などで、専ら石器を使った無土器の狩猟生活が行われたと推定できるのみである。なお、小野忠潤は1978年「山口県の旧石器文化」の中で「後期旧石器の表面採集地点は多く、……、山口湾岸から宇部台地にわたる地域と、下関市北郊で見つかっており、秋吉台発見の旧石器もこの期のも

4) 鈴木 尚『化石サルから日本人まで』第5刷 岩波書店 1975年 31ページ、195ページ。

5) 岡藤五郎『秋吉台および周辺の化石図集』山口県教育財団 1971年 146ページ。

6) 長谷川善和「秋吉台石灰洞と哺乳類化石」河野通弘教授退官記念事業会『秋吉台の鐘乳洞』1980年 219—229ページ。

のの公算が強くなってきた。秋吉台では1956年北馬コロピと船ヶ窪の2地点で旧石器を発見していた。その後1977年になって、この台地に厚いところで層厚2mにも及ぶ宇部火山灰層が局地的に分布していることが明らかになり、上記の旧石器がこの火山灰の上位に当る時期のものとみてよいと考えることができるようになった<sup>7)</sup>と書くほど、この地方の旧石器文化の研究は進んできたが、旧石器発見の先駆をなした秋吉台も、やはり、その資料によって人文生態などを推定することは困難であるが、内陸高原のものとしての特色があったものと思われる。

紀元前7500年前後から同300年ごろまでの縄文文化時代<sup>8)</sup>即ち日本の新石器時代からは、秋吉台も現在に近い状態の日本列島にあって、大陸から隔絶した環境において、弥生文化時代以降の3倍にも及ぶ数千年の長い時代に、縄文人の形質及び文化をすだいでつくり上げたのである。もちろんこの時代の自然環境は、気候変化、したがって海水準の変化、生物や地形の変化のあったことは、小野忠熙の『日本考古地理学』<sup>9)</sup>にも詳説されているところである。

秋吉台上で縄文人の居住を実証したのは既述のように1952年と'56年の調査であるが、その後西秋吉台弥山中腹の観音洞から'58—'60年、伊佐台西ろくコジキ穴から'61年にそれぞれ縄文式土器が検出された。観音洞のは台上に起源するとされた小破片3片で「器形の全貌がわからないので確かな文化小期は不明であるが、破片の示す特徴から推して前期ごろのものではないかと思われる」<sup>10)</sup>と記され、居住址とは考えられていない。コジキ穴は土器片5点が晩期のものとされ、石鏃3点やその原石剥片などもあって「先史時代（縄文晩期）ヒトの生活の場所として利用されていた」しかし「一時的の生活の基地であっ

7) 小野忠熙「山口県の旧石器文化」『山口考古』（山口考古学会）第8号1978年3月。

8) 歴史学研究会『日本史年表』岩波書店 1966年 2ページ。

9) 小野忠熙『日本考古地理学』ニュー・サイエンス社 1980年 38—51ページ。

10) 小野忠熙・三浦 肇・森 恒・太田正道「秋吉台観音洞第1支洞ならびに主洞後洞の発掘調査」『秋吉台観音洞』山口大学秋吉台観音洞遺跡学術調査団 1961年12月。

たと思われる」<sup>11)</sup>と報じてある。なお小野忠熈らの「鷹ヶ穴洞窟をめぐる考古学上の知見」には、観音洞遺跡のある弥山南ろく江良ノ穴を「縄文式土器、貝輪、石鏃、人骨を供伴する埋葬洞窟は、現在のところ本遺跡のみである」とし、その南方台ろくの「真木に縄文時代の遺跡が発見され、縄文式土器、石棒、石皿、黒耀石の石鏃が採集されている」と報じ、<sup>12)</sup>学術的調査を期待している。真木・細小野は、森恒も1963年の『秋芳町史』で「この縄文式土器は、かなり古い時期のものであって」と書き「石鏃は雁股式のものを出しているが、これも相当古い時期のものと思われる」<sup>13)</sup>とし、いろいろな遺構発見の可能性ある地域と記したところである。なお最近、秋吉台若竹山東方にある狸穴の発掘において、洞穴下約90cmの堆積層から石鏃の頭部2箇が発見され、縄文早期のものと報告された<sup>14)</sup>ことは、土器などを伴わないとはいえ貴重な発見である。既述の第1次・第2次調査とも表面採集であり、しかも土器が風化磨滅した小破片であって、その文化小期などの推定が不可能に近かったからである。なお、秋吉台コアフェ穴で、1972年オオヤマネコの化石と共に発見された人骨が、縄文人であることを、'78年、鈴木尚・長谷川善和は、日本洞窟学会学術講演会において発表するに至ったのである。<sup>15)</sup>

こうした一連の発見を合せ考えると、はじめ秋吉台中央地域の船ヶ窪・小郡久保・三角原などに認めた縄文式文化遺跡は、縄文早期にまでさかのぼる可能性が強くなった。しかも縄文遺跡は、白水池近傍の台ろくや伊佐台の台ろく等にも及ぶこととなり、弥山背後などの西秋吉台上にも期待できるようになっ

---

11) 岡藤五郎「山口県秋吉台コジキ穴洞窟調査概報」『十周年記念研究集録』山口県立大嶺高等学校 1961年10月。

12) 小野忠熈・井上行敏・河本芳久「鷹ヶ穴洞窟をめぐる考古学上の知見」『西秋吉台鷹ヶ穴石灰洞』秋芳町 1981年3月。

13) 森恒「古代の秋芳」『秋芳町史』秋芳町 1963年12月。

14) Kawamura, Y. and Tamiya, S. "RePort of the First to The Third Excavations of Tanukiana Caave in The Akiyoshi Plateau, Yamaguchi Prefecture, Western Japan"『秋吉台科学博物館報』第15号 秋吉台科学博物館 1980年3月。

15) 学術講演会出席の秋吉台科学博物館庫本正副館長・杉村昭弘学芸係長談。

た。しかしなお、台上においても、縄文時代の気温や雨量、海水準や地下水準の変化を考慮した上、地形や湧泉・卓越風などへ適応したであろう遺跡の立地等が若干考察できる以外、今もこの地域の人文生態を推定することはできない状態である。ただ精神生活の一面を物語る三角原発見の珧状耳飾（ろう石製・縄文早期）<sup>16)</sup> 1箇のあることをつけくわえておく。第3次ともいふべき発掘を含む学術調査が望まれるしだいである。

秋吉台に先んじて1951年に発見した北九州のカルスト高原平尾台遺跡群<sup>17)</sup>のうち御花畑縄文遺跡は、採石のための破壊を前にしてではあったが、学術的な発掘調査が行われ、竪穴住居址などの生活遺跡は発見できなかったものの、「台地上に生活し土器・石器などの生活遺品が傾斜面に流れたことはあきらかである。縄文土器は前期轟式土器を主体として、塞ノ神式土器がわずかに出土するという北九州縄文文化においてきわめて興味ぶかい遺跡であることは注意されてよい」とし、「御花畑遺跡は九州縄文文化前期の轟式土器を主体とする文化層ということが出来る」との結論を得たのであった。<sup>18)</sup> 秋吉台先史遺跡探究における他山の石とすべきであろう。

## 2. 原史時代

北九州に近い秋吉台は、紀元前300年ごろから始まる弥生式文化の波及は比較的早かったと思われ、その遺跡の分布も山口県西部内陸ではもっとも濃密である。しかし紀元300年ごろからとされる古墳時代を象徴する古墳の著名なものはなく、『山口県主要遺跡分布図』<sup>1)</sup>にも全く登載されていないという状態である。

秋吉台の弥生式文化遺跡は、平尾台の場合と同様に少く「小野報文」で示された弥生中期の馬コロビと明現原（妙見原）遺跡のほかは、文化小期不明の船

16) 1953年に報告したもの、縄文早期と判明、広島大学教授小野忠瀧談。

17) 浜田清吉・小野忠瀧前掲「平尾台の遺物発見地とその遺物」。

18) 『平尾台御花畑遺跡』北九州市文化財調査報告書 第7集 北九州市教育委員会 1971年 15ページ。

注 1) 『山口県文化財概要第4集埋蔵文化財』山口県教育委員会 1961年巻末分布図。



ケ窪遺跡がある程度である。弥生式文化が一躍金属器をともなう稲作農耕を特色とするだけに、乏水性の大きい秋吉台上での水稻耕作は考えられず、中期において原始的畑作と狩猟で生きる居住者がわずかにいたと想像しうるだけである。嘉万ポリエにのぞむ松皮丘陵の南端に比高50mばかりの弥生前期の高地性集落である大日遺跡<sup>2)</sup>や、大嶺ポリエにのぞむ伊佐台西端の比高40mの「弥生式土器、石器類が多量出土している高地性集落址」としての「弥生中期と思われる」彦山遺跡<sup>3)</sup>の如きがさらに発見精査されれば、弥生時代の秋吉台上の人文生態もある程度開明できるかと思われる。

秋吉台を東西にわたる厚東川ぞいのポリエにのぞむ洪積台地には、1953年の最初の報告で記載したように弥生遺跡の発見は早かった。森恒による先駆的な採集をふまえて、瀬戸・細小野台・宮地・岡台などを調査して弥生式土器や石器を報告した。森は'63年の『秋芳町史』の中で、瀬戸遺跡は「これらの土器は、いずれも弥生前期の土器で、本町中最も早い時期に属する土器である」とし、宮地遺跡についても「いわゆる遠賀川式土器の特長を備えているところから見て、また器形をも合せ考えて弥生式前期から中期にかけての土器であり、瀬戸のものよりややおくれている時期のものである」、岩永の亘遺跡についても「大体嘉万宮地と同一で、弥生前期・中期の土器である」と記載している。<sup>5)</sup>また、中台東ろくの厄神遺跡からは「弥生時代の原始墓の特質を示す石灰岩の箱式石棺」<sup>6)</sup>が出たり、嘉万ポリエの氾濫原の微高地にある中村遺跡が発見されたり<sup>7)</sup>して、弥生式文化が低地において稲作中心に展開したことを証している。西秋吉台西辺とくに伊佐台西ろくにも、弥生中期の土器や竪穴状遺構

---

2) 小野忠熙・井上行敏・河本芳久前掲論文。

3) 河本芳久「美祢市域の主要遺跡点描」。山口考古 第3号 1974年5月。

4) 森恒「秋吉を中心とする考古点描」『社会科研究』（山口県社会科教育研究会）第3号 1949年11月。

5) 『秋芳町史』秋芳町 1963年 60—65ページ。

6) 小野忠熙「石灰岩の箱式石棺」『秋吉台科学博物館報告』第1号 秋吉台科学博物館 1961年。

7) 小野忠熙・伊藤彰・中野一人・富士埜勇・河本芳久『中村遺跡調査概報』山口県教育委員会・秋芳町教育委員会 1969年。

も発見された向原遺跡や大嶺ポリエ西辺の台地や低地に、やはり弥生式土器や竪穴遺構をもつ中村遺跡、上領遺跡などがある。<sup>8)</sup> これらポリエの弥生式文化の生活者も、狩猟や採木採草などを通じて台上とも結ばれていたものと思われる。

古墳時代においては、東秋吉台の中央部での居住は行われなかったようで、「小野報文」が「台麓に近い長登に見る1片の古い須恵器があるに過ぎないので、今のところその存在を明らかにすることができない」と述べた通りである。したがって秋吉台においては、無土器文化時代から始まった居住は縄文文化時代でとだえ、弥生文化時代中期に復活されはしたが、その後はまた、古墳文化時代を通じて行われなかったものようである。それは主として、社会・経済・政治的時代背景に由来した断続的居住現象と見るべきであろう。

#### IV 有史時代

##### 1. 上代・中世

有史時代は文献資料の得られる時代とはいえ、その乏しい上代や中世などは考古資料もまた重要である。秋吉台を考える場合などは特にそうで、小野忠熾は『日本考古地理学』の中で、「谷底平野や内陸盆地を除く山間地域には、古墳時代の遺跡の発見例が極めて少く、山麓線付近の各所から土師質土器や退化した須恵器あるいは瓦などを出土することから、平安時代から中世のころに村落が成立しているところが多いことを示している」とし、「このような現象はカルスト地形の秋吉台でも明瞭である」<sup>1)</sup> と、秋吉台を例示している。

秋吉台で採集した遺物は、中世から近世に属するものが最も多く、「1952年調査」で67%にあたる327箇、「1956年調査」で74%の984箇となっている。それらの分布が示す遺跡は「小野報文」で「多量の土器片を出す中世から近世の遺跡は、台面の広いウパーレ底に存在し、また少量のこの時期の土器を出す地点は、先縄文・縄文・弥生式など各文化時代の遺物散布地と重複している」と

---

8) 河本芳久前掲論文21ページ。

注 1) 小野忠熾前掲『日本考古地理学』117—118ページ。

述べている状態である。そうして台面の居住や耕作についても「中世も特に後半になると、再び中央部まで進出して住居を営み、ドリーネの開墾が始まったのであるが、その後住居は放棄せられて廃墟と化し、遺物散布地と長者伝説などの伝承の中に、わずかに往時の痕跡を残しているに過ぎない」と要約するところとなっている。また西秋吉台の江原地域においても、最近の探査によって小野忠熈らは「表採による土師質土器・瓦器・陶磁器の破片はいずれも中世以降のものであり、江原ドリーネに人々が居住するようになったのは中世以降と推定される」<sup>2)</sup>と結論づけている。

これらはみな、文献資料のほとんどない秋吉台において、進んで考古資料を求めて歴史の開明をはかったものである。しかしそこにも限界があって、社会の組織や政治の過程などを知ることは不可能に近い。真実性はともかく古文書の残片でも、伝説や民間伝承、さらに古代語の化石ともいわれる地名でも、それらの中から民族学・民俗学・言語学・地名学などからの研究によって、史実をひろく探求する努力が必要であろう。こうした視座で秋吉台をみると未開拓であって、ここでも若干の問題を提起し得るにとどまり、多くを今後の研究にまたねばならない。

さて、秋吉台のアキヨシが、台ろくポリエの湿地帯の「アシ・ヨシ」に由来するという真実みのある伝説はともかく、10世紀にさかのぼるこの地方の郷名が、秋芳洞の古名「滝穴に因るか」として和名抄の久喜（くき）郷をここにあってた『防長地名潤鑑』（以降地名潤鑑と略称）<sup>3)</sup>における御蘭生翁甫の推理は正しいと思われる。出雲浦の加賀の潜戸（くけど）北九州の洞ノ海（くきのうみ）の例をひき、クキもクケも同語として、すでに広く知られた台ろくの山穴即ち滝穴に由来したとみるものである。また秋吉台東辺の接触鉱床地域は古くから銅や銀の産地として栄えたところで長登（ながのぼり）と呼ばれている。弘化年間に成立した『防長風土注進案』（以降注進案と略称）に「金山所にて

---

2) 小野忠熈・井上行敏・河本芳久前掲論文61ページ（文中の江原ドリーネはウバーレが妥当）。

3) 御蘭生翁甫『防長地名潤鑑』防長倶楽部 1931年 829—833ページ。

往古奈良の都大仏鑄せらるる時大仏鑄立の地金として当地の銅貳百餘駄貢かしめらる其恩賞として奈良登の地名を賜り、其比天領にて御制札にも奈良登銅山村とありし由言伝う。いつしか奈良を長と唱え替へたる訛詳ならず」<sup>4)</sup>と記している。近藤清石は『山口県風土誌』で「按ずるに牽強附会なり」<sup>5)</sup>としているが「地名淵鑑」の御菌生はこれを否定せず、『延喜内蔵寮式』の諸国年料供進の文を引用して「……と見ゆる緑青は此地の所産ならんか」とし、『毛吹草』にも「長門国銀銅長登緑青と見えて、長登村瀧の下緑青の上品を産す」などあるとし、更に注進案から多数の銀銅鉾山名をかかっている。事実、注進案は「かな山」の項でも、つづらが葉山を「銀山にて往古大盛の節御手山に成りたる事も有之山」、北平山を「白目山にて往古より幾度も大盛あり（中略）京江戸大阪へ錢座御免のせつは此山の白目幾万斤という事なく注文有之、大阪より銀主下りたることも度々あり……」また花の山も「銀山にて往古大盛のせつ山子千人も相持たる由、今以千人まぶと申大なる窟有之候」大切山も「銅山にて往古大盛、就中寛永年中別而大盛也」などと書かれ、その他烏帽子岩山、浜の宮山等の銅山や銀山がのせられている。従って、地名そのものの由来は別として、12世紀末、東大寺建立にかかわる重源和尚の周防国下向徳地山入りのこともあった当時として、長登銅山の開発と銅の貢送は十分推定し得ることである。進んで「家並も昔しは千軒及之所」地域などの学術的発掘が行われれば、かなり古い時代の史料を見出し得ることとなり、長者ケ森伝説などのもつ積極的意味を解することができ、ひいてはカルスト人文生態もいくらかはつきりするであろうと思われる。明治初葉の土地台帳上の、麻畑台・牛ケ窟・出来水・水溜といった字名や「五万分の一地形図」初版に見える馬コロビ・帰水・鬼穴・矢穴などの小地名も意外に古い時代の歴史の証人であるかもしれない。台麓にしても、注進案の青景村にかかれた銀山とその鉾山集落の盛衰やそれに

4) 『防長風土注進案』 萩本藩 1844—'48年（山口県文書館編集による復刻版 第17巻 1962年による）450—460ページ。

5) 近藤清石『山口県風土誌』山口県地方史研究会編復刻版 第4巻 マツノ書店 1972年 296ページ。

因む地名をはじめ、久喜郷とならぶ和名抄の賀萬・美祢・位佐（伊佐）の郷名や銭屋・別府などの地名もまたそれぞれある種の歴史を示唆するものとして深究に値するものと思われる。

## 2. 近世以降

近世以降現代までの秋吉台における人文生態の推移変遷は、人間生活のおもな分野によって、農業的、鋳業的、社会的および文化的適応に類別して考察を進める。

### a 農業的適応

農業を広い意味でとらえ、ほぼ原初産業の分野をまず概観する。秋吉台は始め狩猟の場となり、焼畑の形の原始畑作が加わり草原化が進んだと思われるが、ドリーネ底の耕作が中世以降と推定されるのは既述の通りである。弥生時代も進むにつれ台ろくの稲作居住民は台上に芝草・樹木を求めるにいたり、地味と水湿に乏しい台上では、原始的樹林が縮小し、植生の遷移、草原化が早かったであろう。山焼きも行われ広い草刈場が維持されるとともに、自然にも人工的にもマツを主とする現在の林相植生が成立したと思われる。既にふれたように、原始に近い照葉樹林を残すのは台上の長者ヶ森のほか、カルスト地形特有の台腹の急斜面の大洞窟付近とか、巨大な竪穴の入口の急斜面などで、原始的・遺存的面影を留めるところがある。なお、水湿や腐植などの集積するカルスト凹地はもちろん、透水性のつよい厚い残留土壌の緩斜面などでは、マツ・スギなどの成長も早く、スギやヒノキの造林地もかなり見られる。また、成長が早く繊維も良質なシュロは古来西秋吉台江原地方などで積極的に栽培し商品として売り出されたものである。『地下上申』絵図に、藩公有の用材林である御立山（おたてやま）の滝山や経塚山が描かれており、注進案の秋吉村書出にも、百姓私有林の合壁山（かっぺきやま）が台山にある。また台山の草野について「草刈場の義は遠村よりも入来り山奥に相成りては諸村入相の刈場に候事」と書かれている。千鞍台の別名や馬コロビの地名なども、馬の背に頼った



第 1 図 地下上申絵図・滝穴付近 (1729年)

盛んな草刈りにちなむものである。牧馬そのものは注進案にも奥秋吉台の赤郷や西秋吉台の江原で行われた記録を残すだけである。<sup>1)</sup>「田植後の 100 日間行橋平野の農家から牛を預かり、草野に牧し 1 頭につき米 1 俵を報酬として受ける」<sup>2)</sup> 平尾台カルストにおける「預り牛」のような現象は起らなかった。

しかし秋吉台の草原には、全く新しい適応として、近代的牧場風景が展開することとなった。その核となったのは、岩永台南ろくの草野に富む乾性の河原ポリエに 1906 年創立された山口県種畜育成所(牛馬)で、その後山口県種畜場と改名して発展し、'78 年には防府市にあった山口県種鶏場もあわせ、組織を強化して今日の山口県畜産試験場となった。1965～'68 年には背後の岩永台と東秋吉台の長者ヶ森東方の広大なカルスト台地に、乳肉用牛の育成牧場が建設され、岩永団地・秋吉台団地とよばれている。前者は 300ha の地域で夏季 320 頭冬 190 頭、後者は 168 ha の地域で通年 120 頭が放牧されており、後者では常時 100 頭の子牛の哺育も行われている。また東秋吉台の笠木山を中心に 100 ha

注 1) 『美東町史』美東町教育委員会 1974年 125—128ページ。

2) 浜田清吉「平尾台カルストの人文生態」『平尾台カルスト』第 1 集 小倉市 1952年11月。

の秋芳町立の秋吉台牧場が設けられ、1962年から乳肉牛の放牧が行われている。カルスト草原の利用としての経済的意義はあるが、東秋吉台のように特別天然記念物を中核とする国定公園における施設であるだけに、機械化・大規模化を意味する近代的牧場経営は、自然破壊や植生変革を伴うことが多く、利用と保全との競合という重要な問題を背おっているのである。

秋吉台における農業的適応の標兆的なものは、ドリーネ耕作即ち窪畑である。それはドリーネ景観のカルストの典型をなす東秋吉台の連続的の台面が中心となっている。この地域は注進案でも秋吉村の條でのみ特に台山として取り上げている。「右東は大田、南は秋吉、西は嘉萬・青景、北は赤・絵堂都合六ヶ村に根おろし仕候山にて惣名秋吉台という」とすでに「秋吉台」と明記した地域である。「当山平地と申広野凡貳里四方にして畠開作亦は榎椿杯植附の場所に宜候へども、水不如意なれば人家昔より無之候」とあるが、この畠開作が窪畑の開発経営である。ドリーネ底への昇降の不便はあるものの乏水性の台面上における唯一の貴重なオアシス的耕地で、私有地とされ、おもなドリーネには命名もされている。

ドリーネ耕地を学界で最初にとりあげたのは、1907年の『大日本地誌』で「カルスト地に特有なる吸い込み穴即ちドリーネと称する摺鉢状の陥没地あり」としてドリーネを説明し「土質甚だ豊沃なるにより、菽麥野菜の耕作は肥料を要せずして此底部に行われ、満目荒涼たるカルスト地方に於て點々たる耕地をなし、頗る異様の観をなせり」<sup>3)</sup>と記している。しかし詳細な調査報告は館林寛吾の「秋吉台に於けるドリーネの人文地理的考察」<sup>4)</sup>であり、ついで織田武雄も「秋吉台のカルストのドリーネ」<sup>5)</sup>の中でドリーネ耕地も問題にした。筆者もこれらをふまえた上で調査を重ね、初めに掲げた1940年の「秋吉台の地理的研究」で、ドリーネ耕作景観として報告した。館林と織田はドリーネ

3) 山崎直方・佐藤伝蔵『大日本地誌』第6巻 博文館 1907年 112ページ。

4) 館林寛吾「秋吉台におけるドリーネの人文地理的考察」『地球』第15巻 第5号 1931年5月。

5) 織田武雄「秋吉台のカルストのドリーネ」『地理教育』第24巻 第4・5号 1963年1・2月。

耕地の畑作を主に取り扱い、久保畑あるいは窪畑の名を採用しているが、筆者は西秋吉台にある老年ドリ一底の水田をも、湿性ドリ一ネ耕地として窪田の名で合せ取り上げている。館林の1931年に合計172町歩あったドリ一ネ耕地が、筆者の'40年には46.3町歩に減少、ドリ一ネ耕作戸数も627戸から306戸と半減している。ちなみに'40年調査時の耕地をもつドリ一ネ数は1,583である。陥没や土壌流失を防ぐため、ドリ一ネ底は鏡餅状に整えられ、そこでゴボウ・サトイモ・ダイコンなどの根菜類、ダイズ・アズキなどの豆類、その他麦類・ソバ・ゴマ・サツマイモ等が栽培された。透水性のよい深い耕土に適応して長大な風味のよいゴボウがよくでき、平尾台・帝釈台・草間台・青海カルストなどを通じてカルスト耕地の名産となっていた。またドリ一ネ周辺にはハゼ・コウゾなども植えられたが、夏は日蔭をつくる陽樹で落葉する値段も高いキリは、ドリ一ネ耕地周辺最上の適応樹木とってよいものであった。なお昭和10年代に入ったころ青景台の窪畑で、孤立した隔絶的分断耕地を活用して、大根の採種栽培を行い、「割安な種子」として好評を博したのは窪畑に対する適応農作として、これまた巧妙なものであった。しかしこれら台上の窪畑は放棄される運命をもち、今はほとんど見る事ができない。

台麓のカルスト平野ポリエには、出口のない佐山のような溜河しかない盲谷があったり、或は多雨季に氾濫湖をつくり、或はジバスと呼ばれる堆積地ドリ一ネの陥没<sup>6)</sup>など特異な現象がある。注進案でも赤村の条に、白魚洞前の沼ポリエでは「碓、横野、小川沖田之儀は五月雨中其外長雨之節は悪水夥しく流れ込、五七日も沼り水損も有之候事」と記し<sup>7)</sup>、「大概畠作計にて」という佐山ポリエには、巧みな適応作として著名な「赤ゴボウ」<sup>8)</sup>の中核産地が形成されたのであった。新しい適応作として市場の声価を高めているのは、台麓斜面を

6) 1946年12月の南海地震の時は、堅田や嘉万ポリエを中心に150余の急性陥没ドリ一ネが発生した。

7) 1932年から'47年までの16年間に梅雨季のもの6回、台風季のもの10回氾濫湖が生じた。

8) 赤ゴボウは旧村名赤産のゴボウの意、その市場町名で「大田ゴボウ」ともいった。平尾台上ポリエの「平尾ゴボウ」も有名であった。



中軸とする畑地帯で生産される「秋芳ナシ」であるが、「秋芳イチゴ」なども近年知られてきた。

なお、秋吉台は太平洋戦争直後の緊急な開拓居住地としても注目された。長登の旧軍廠舎に入居した人の畑として長者ヶ森一円の台面まで開拓が強行されたが成功せず、三角原付近まで後退した。於福台は老年的なカルスト地形面でもあって、「緑ヶ丘」と呼ばれる開拓団地が成立し、広いハタパコ畑なども見られるが、これも残留者はわずかである。ここは於福ポリエにのぞむ比高200m近いカルスト急斜面上に隔離した高原であって、交通的不利が大きな支障条件となったのは明らかである。

## b 鉱業的適応

秋吉台の鉱物や石灰岩そのものを、資源として採掘すること及びそれら鉱産物に加工する事象を鉱業的適応として追求する。鉱物の利用が文献に初めて見えるのは、927年に成立した『延喜式』の付録「和名考異」の鍾乳石で、河野通弘は原文を引用して「山口県美祢郡から鍾乳石を産することが都に知られており、秋吉地方のどこかの石灰洞で採集されたものが石薬として利用されていたものと思われる」<sup>1)</sup>と書いている。また日野巖は1843年と'47年に、萩の医学館の本草出精の者数人が秋吉の広谷に鍾乳石の採薬に出張したことを記載している。<sup>2)</sup>このように石灰岩地特有の鍾乳洞の二次生成物が、最初の記録として文献に見えるということは、秋吉台を特色づけるものとして注目される。

奈良時代から長登で銅が採掘されたことや青景銀山のこと、長登一円の銅や銀の鉱山群の存在は既に述べたところである。その後の変遷推移は審かでないが、明治以降も時代の流れに応じて、長登鉱山の銅・コバルト、北平鉱山の鉄・銅、水溜鉱山の銅・鉄、さらに西秋吉台新於福鉱山の残留鉱床の鉄や赤谷山付近のマンガンなどの採掘が太平洋戦争のころまで断続的に行われてきた。

---

注 1) 河野通弘「秋吉台の石灰洞の研究史」前掲『秋吉台の鍾乳洞』1980年3月。

2) 日野 巖『防長本草学及生物学・農学年表』マツノ書店 1977年 65—66ページ。

石灰岩そのものに関しては、その変成した大理石が、注進案にも秋吉台山の条で「土地は紫色にて間に間に寒水石あり、已然は掘とり上登せ交易仕候得共、津端遠く往返費にて当時は取止め候」と見え寒水石（方解石）として発掘利用されたことがわかる。明治以降東秋吉台に多い美しい色ものと、於福台などの白ものやフズリナ・サンゴ・ウミユリ・腕足貝など、化石の入った石灰岩やオニックス・鍾乳石・石筍などが採掘され加工されて、置物・風鎮・門札などの土産物とされている。建築材・配電盤などに利用される白い大理石は日本第一の産地の地位を長く続けている。

石灰岩の、石灰として肥料や白壁などへの利用は古く、注進案にも、赤村に「石灰焼立凡千六百俵位」、嘉万村に「石灰百俵位」と記されている。明治時代に入ると1887年の記録では、西秋吉台西部の於福・大嶺・伊佐の3村だけでも26の石灰製造所が存在していた。焼成のため大嶺無煙炭が使用され、1905年鉄道大嶺線（今の美祿線）が開通されて販路がひろがり生産が増加した。大正時代となり先ず小野田セメント（1915年）、ついで日本石灰（1919年）が採掘を始め石灰産業として近代化、1925年には明治時代の数倍の年25万 t に達している。太平洋戦争後はセメント工業、ソーダ工業の発展につれて飛躍的に発展し1965年には9 鉱業所400万 t をこすにいたったが、その90%以上を宇部興産伊佐セメントと、先きの小野田セメントで占めていた。この年には西秋吉台北東部に住友セメント秋芳鉱業所も進出し、北浦の仙崎湾岸まで約17kmのベルトコンベアで送り出すにいたり、また宇部興産も宇部港へ専用道路を開設したので、1975年には年産1,700万 t に達するにいたった。

全山石灰岩という鉱物資源である秋吉台の宿命とはいえ、採掘は急速に台面や山頂にまで及んで、他の経済・社会・文化的な利用や保全と競合をきたすに至っている。西秋吉台発見の哺乳動物の遺骸や人骨などの化石の多くが、石灰岩の採石場で得られたものである点からも、採掘破壊前の原形の学術的記録と共に、採掘時の学術的関心——一種の埋蔵文化財としての慎重な配慮が企業倫理として強く期待される。

c 社会的適応

秋吉台における社会的適応として集落・交通・民俗などはもちろん、政治的境界や軍事的利用などまでひろく含めて若干の考察を進める。

東秋吉台は無居住地帯で、考古学的調査以前は、専ら長者ケ森伝説が問題となるにすぎなかった。この伝説は中世のころの長登鉾山の繁栄とかかわる伝承であろうと推定してきたが、『秋芳町史』に大庭青雨の同じような推理が興味深く展開されている。また、長者ケ森から背景に通ずる地獄台西辺に残る良悟松についても記載されている。<sup>1)</sup> 1716年山口糸米の法泉寺に住山した良悟禪師が、今の長門市の大寧寺との間を往来し、すでに草原化していたカルスト特有のラビリンス状の地形における「道しるべ」として植えた並木松で、「大寧寺松」とも呼ばれたものである。近年まで数十本残り、美しい点景でもあったこの良悟松も、近年松くい虫の害を大きくうけるにいたっている。この大田・青景間の往還と交叉するように、萩城下からの赤間ケ関街道の絵堂・秋吉間が、三角原から台上を通り大久保・広谷のウパーレ・ポリエ線を通っている。さらに滝穴の広谷から鬼谷凹地帯を通じて青景の小野へ、或は長ジャクリ・馬コロビ・長者ケ森の凹地帯を経て植山へと先史以来と思われるカルスト凹地帯に適応した主要路がある。西秋吉台でも江原・入見・奥河原を結ぶウパーレ列は、古来南北の要路となっている。

この西秋吉台の南北に並ぶウパーレには集落が成立しており、入見も谷中分水は低いが盲谷をなし排水はポノールから地下に行われ、江原の如きは大噴火口状の典型的なウパーレである。既に述べたように考古学的調査によって中世以降と推定される江原集落社会は、地形的な隔絶社会で、注進案の記す「畠作計にて田地一向無之」の畑作本位の生活をしている。耕作は台上のドリーネはもちろんそれらの分界面などの緩斜面にも及んでおり、換金作物のハタバコも栽培され、滞水性のあるドリーネを窪田として経営したり、北麓のポリエの水田への出作りも行われてきた。なお大理石産地を背後に控え、その採掘関連の

---

注 1) 前掲『秋芳町史』440—441ページ。

仕事も生活に深く組みこまれてきた。雨水はポノールから地下に潜入，湧泉や井戸が少く天水に大きく依存してきた。水神社をめぐる数十世帯の血縁的でさえある隔絶的な地縁社会である。

台上には河流がなく，ウバーレやドリーネの底に帰水・出来水・かくれ水などの表現が物語る僅かの湧泉しかないが，台麓においては強力な湧泉が多く，地下流をはき出す秋芳洞流のような洞源河（仮称）もある。他面佐山ポリエの犬ヶ森（佐山）ポノール，三角田ポリエの三角田洞，沼ポリエの白魚洞，於福ポリエの入水ポノール（於福洞）のように地上流の流入するものもある。また，流入口から逆に流出現象のおこる白魚洞や芹田ポリエの森ヶ浴の穴などもある。注進案でも「出水の逆流」とし注目された小野の逆水川といったカルスト水理特有の奇現象さえある。そのため滞水耕作不能な佐山のような乾性ポリにも時に氾濫湖現象が起り，強力な湧泉・洞源河をもつ白水池流域や広谷ポリエなどにはカルスト特有の氾濫湖現象が起る。その比較的低温できれいな水は水稲の被害を小さくしており，耕作法や品種の選択にも，それに応じた考慮がはらわれてきた。その他カルスト水理にちなむ社会的適応が見られる。滝穴（秋芳洞）における大洞寿円禅師の崇高な雨乞（1354年）をはじめ，景清穴・兼清穴・龍宮穴などや不思議で強力な湧泉や地下水の窓のような天然井戸で雨乞が行われたのである。また注進案にも「辨天清水」として書かれた堅田ポリエの厳島神社境内の弁天池によって，堅田が水田化したし，下流部との水の分配が問題となり，水論の結果は，「水分け」の取り決めと慣行を生んだ。『秋芳町史』にも詳述されている<sup>2)</sup> 弁天池伝説一神授の泉水に感謝してはじめたと解される「別府念仏踊」は，山口県の無形民俗文化財にも指定（1968年）されている。<sup>3)</sup> 秋吉台には，鋭い露岩のラビエや深いドリーネ・アバンといった凹陷地があるとはいえ，その波浪状の広い無住の大草原は，軍事演習の場として優れた条件を備えている。早くも1885年広島旧野戦砲兵隊がきて，長者ヶ森付

2) 同上書 136—140ページ。

3) 『山口県文化財要録』第3集 山口県教育委員会 1977年3月（無形民俗文化財）53—56ページ。

近から龍護峯（秋吉台の最高峰 425.5 m）方面に向って砲撃演習を行っている。下関の要塞砲兵隊もきて、経塚台から長者ヶ森方面に向って同じく砲撃演習を行ったが、1896年山口歩兵第四十二聯隊が創設されてからは、主として同隊が長者ヶ森と馬コロビを中心とする秋吉台中央部一円において密度の高い使用をした。そうして1909年には長登に宿営のための廠舎も建設されるにいった。大正時代となり、第五師団は共和・別府・秋吉・大田・赤郷の関係五ヶ村と賃貸契約を結び1,700町歩の「秋吉台大田演習場」を、1922年より継続して使用し、太平洋戦争の終わった1945年の8月末に解約返還したのである。<sup>4)</sup>年間延べ1ヶ月前後演習が行われ、大剣・小剣・笠木山・流丘・義経山・弁慶山などの命名も行い、危険な豎穴を多数埋めたりもしたが、演習時以外は通行・耕作・採草・大理石採掘などは自由に行われ、「山焼き」も年々実施され、軍民間の困難な問題は起らなかった。しかし、戦後の1946年には、山口駐留のニュージーランド軍部隊が接收して実弾による射撃演習をはじめ、ついで'49年米軍が進駐した。'51年の平和条約によって接收解除、同時に日米安全保障条約によって自動的に引継がれて'54年ごろまで使用され、その後陸上自衛隊の演習地となった。その間、自然の破壊や周辺住民の被害が問題となったが、'56年岩国駐留の米海軍航空隊の爆撃演習地化の問題が起り、重要な局面を迎えた。学術上の重要性ゆえの保全を最も重視した反対運動は、内外の学界からの強い支持協力を得て成功し、貴重な天然の記念物カルスト台地は保全されることとなったのであった。<sup>5)</sup>

農業の適応以降のべてきたような、人間との結びつきをもった秋吉台の政治的分割は、おそらく、台ろくポリエが生活の中心舞台となってからであろう。入相の採草地という長い農本的生活時代の反映として、台ろくの村からそれぞれ分割されたと思われる。したがって、奥部においては尾根すじ谷すじのない

---

4) 前掲『秋芳町史』462—465ページ。『美東町史』452—453ページに詳述されている。

5) 『秋吉台大田演習場小誌』山口県・秋芳町・美東町1961年3月爆撃演習解除記録として詳述されている。

迷路状のカルスト地形のゆえにも、境界帯ないし、あいまいな境界線が、戦後の「町村合併期」の直前まで続いたとってよかろう。近世末期の注進案の時は、美祿宰判の秋吉・大田・長登・絵堂・赤・青景・嘉万・岩永と、吉田宰判



第2図 防長両国村別地図上の秋吉台 (1884年)

の於福・大嶺・伊佐・河原の合計12村に分割されていた。(図2<sup>6)</sup> 参照) これらの秋吉台上における境界は、『地下上申』の「隣村境書」の条や『山口県風土誌』の「境界」の条で、詳述されてはいるが、現地で境界線を見定めることは不可能に近い。普通の山谷地形と異なる円い大小緩急の凹凸地形を示すカルスト地形のためである。明治となり、1889年市町村制がしかれた時には、長登が大田村に入り、赤と絵堂が赤郷村となり、青景と嘉万が共和および別府村に組みかえられ、河原が伊佐村に入ったので9村となった。その後大田・伊佐・大嶺は町制をしていたが、近年の町村合併で現在の秋芳町・美東町および美祿市に三分割される結果となった。したがって、東秋吉台には秋芳と美東の境

6) 「防長両国村別地図」石川卓美編修『山口県近世史研究要覧』付図 マツノ書店 1976年を基図として秋吉台の範囲を記入したもの。

界，西秋吉台には秋芳と美祢の境界が残存するだけになったし，カルスト微地形からくる境界の問題は，精度の高い「1：25,000地形図」<sup>7)</sup>ができたこととも相まって，ほとんど解消したといってよい。

なお，観光時代となり，台上のエギゾチックなカルスト景観が注目されるに従い，秋芳洞背後の台上には，展望台・休憩所・みやげもの店・ホテル・旅館・国民宿舎・ユースホステル・管理事務所および道路公団の事務所などの観光集落が成立した。また，黒谷支洞のトンネル開通を契機に，秋吉台最大の矢ノ穴ドリリーネ底にも観光集落が形成されてきた。

#### d 文化的適応

秋吉台固有の地質・地形・地下水をはじめ，そこに適応した石灰岩植物や洞窟動物，さらに人骨・動物化石および人間の生活遺物は，それぞれ対応する諸科学の研究対象となる。そうして，地上地下にわたる珍奇なカルスト景観とともに，総合的な研究・観光・ケーピング・教育などの集約的地域を形成している。そのため，秋吉台の台面や洞窟は，採取・加工・施設など自然の変容破壊を伴う人間的刻印をうけることとなった。こうした人間的刻印を秋吉台自然に対する人間の文化的適応の結果とみて概観する。

秋吉台への学術的関心は，すでにふれたように，石薬としての鍾乳石，従って鍾乳洞から始まったかと思われる。観光的関心もまた鍾乳洞からで，早くも18世紀初葉の『地下上申絵図』には「滝穴ノ中ニ三十二景アリ」<sup>1)</sup>と注記されている。ついで注進案にも「土人又明まつを燈し多人数この穴に入る事凡三四丁いろいろの所あり」と記し，千畳敷・高棧敷・壁岩の名も見え，「其の深き事又何れに通じたるや知る人なし」など詳細にかいている。なお，滝穴のほか景清穴・兼清ノ穴・蝙蝠穴・呼岩ノ穴なども記されている。明治時代もなかばを過ぎ，近代科学の立場からの学界報告は20世紀初頭にはじまる。鍾乳洞の報

---

7) 国土地理院発行「1：25,000地形図」秋吉台・秋吉台北部・於福・伊佐図幅参照。

注1) a, 農業的適応の「地下上申絵図，滝穴付近」参照。

告がやはり先駆するけれどもカルスト地形と認知しての報告もこれに続いている。<sup>2)</sup> この時期までは、採集・探勝・調査ともに軽少かつ素朴で、自然の変容などと問題になるほどではなかった。

しかるに、滝穴の観光開発に情熱をもやした梅原文次郎<sup>3)</sup> によって大きな転機がもたらされた。1907年山口高等商業学校外人教師エドワード・ガントレット (Edward Gauntlet) と広島高等師範学校教授中目覚に滝穴の学術調査を依頼し、その評価と助言を得て「同年初めて洞内の滝や溪流に栈橋を架け、長湊に渡し舟を浮べ、猿スベリに鎖を設ける等本格的施設を施したため、今まで半裸に等しい姿で白滝を登り、岩壁をよじ、洞内湖を歩いていた危険がなくなり、一般婦女子にも容易に探訪出来る便が与えられた」<sup>4)</sup> のであった。その2年後梅原は私財を投じて盛大な開窟式を行い、雨乞の寿円禪師入寂の場所である龍ヶ淵の岩上に準提観音の石仏をも勧請したりしている。かくて、翌'10年夏には、最初の団体観光とも称すべき下関の長門新聞主催の「滝穴探検団」男女150人が訪れている。<sup>5)</sup> ロンドン王立地理学協会々員でもあったE・ガントレットは、洞窟を中心に全秋吉台を踏査、竪穴も探検して「秋吉台山洞穴略図」を作り、母国イギリスへも滝穴などを報告した。'12年山口県教育会におけるE・ガントレットの講演「滝穴探検談」に触発され、その翌日、山口にある官衙学校の首脳を中心とする有志40余名の探検団が、地元官民の歓迎と案内をうけて訪れている。<sup>6)</sup>

その後、天然記念物委員神保小虎・佐藤伝蔵らが滝穴・景清穴の調査を行い、この二つは、1922年鍾乳洞としては日本で初めての天然記念物に指定された。翌年滝穴は、広谷部落の経営から秋吉村営となり、たいまつ・石油ラン

---

2) 浜田清吉前掲『秋吉台カルスト』4—10ページ。河野通弘前掲「秋吉台石灰洞の研究史」および前掲『西秋吉台鷹ヶ穴石灰洞』2—6ページに詳述。

3) 梅原文次郎は近江の人で大田鉾山経営、秋吉に在住。

4) 前掲『秋芳町史』447—451ページ。454—458ページに詳述。

5) 前掲書453—454ページ。なお「秋吉台山洞穴略図」(ガントレット手記)は秋吉台最初の洞窟分布図 縮尺は約1:50,000 日附を欠ぐ。

6) 前掲『秋芳町史』451—453ページ。



プ・カーバイトランプの照明にたよっていた洞内に、40箇所電灯による照明がほどこされ、近代的な観光へ脱皮した。さらに'26年、洞内湖長淵の渡し舟と洞口その他の栈橋を新調して、東宮殿下を迎え、滝穴は秋芳洞（あきよしどう）の嘉名を得たのであった。その後入洞者の増加と科学技術の進歩に応じて、探勝路は整備され、<sup>7)</sup> 照明も蛍光灯・水銀灯などと改新強化され、ついには台上へのエレベーターが穿たれ、黒谷支洞が開発され矢ノ穴トンネルも通ずるといふ大変化をみたのである。洞窟形態の変容、洞内空気の温度や湿度や流れの変化、照明による洞壁や鍾乳石の緑化汚染、洞床や洞床流の汚濁等は、洞窟動物の環境激変を意味するもので、見学探勝と自然保全の競合は観光洞にとって困難かつ重要な問題である。このことは観光洞となった大正洞や景清穴（景清洞と通称）もほぼ同様である。外へのトンネルを穿った大正洞も台上の中尾洞と共に、'23年天然記念物に指定されているし、秋芳洞は'52年特別天然記念物に昇格指定された貴重な存在であることを再考三思しなければならない。

台上のカルスト景観が観光の対象となったのは戦後といつてよく、<sup>8)</sup> '49年皇太子殿下ご展望地が「若竹山」と命名されたころを転機とし、「米軍の爆撃演習問題」で内外の注目をあび、'56年の秋芳洞エレベーター開通や秋芳洞上台面への若鳩観光道の完成により、飛躍的に観光客の増大をもたらしたのである。'58年には山口県の青少年宿泊訓練所開設や秋吉台展望台完成、ついで翌'59年には待望の秋吉台科学博物館も創立されたのである。既にふれた国民宿舎若竹荘と黒谷支洞開発および矢ノ穴トンネル開通が'63年であり、しかもこの年、第18回国民体育大会山岳競技が天皇・皇后両陛下を迎えて有終の美をなすなどのこともあって、台上は秋芳洞と連関した車の両輪のような学術観光の場となったのである。

また、すでに1928年天然記念物に指定されていた「秋吉台山の地獄台」（50

---

7) 1951年長淵の渡し舟を廃止して栈橋をもうける。

8) 1939年筆者が調査を始めたころは、台上のカルスト風景を求める人は皆無の状態であった。

ha)を核心として広域化された東秋吉台の主要部(1,384ha)が、'61年天然記念物「秋吉台」となり、さらに'64年には特別天然記念物に昇格指定となった。これより先き'55年、この学術的評価の高い地域を取りかこむ特異な風景の東秋吉台(4,534ha)は、狭域ながら独立の国定公園「秋吉台」に指定され、若干の施設がほどこされていた。なお、'70年には秋芳洞前の広谷ポリエから奥秋吉台の佐山ポリエまで、道路公園の秋吉台有料道路が開通したのである。'71年には秋吉台管理事務所もおかれ、'73年県と地元両町とで秋吉台保存管理マスタープランがつくられ、開発利用と自然保護の調整がとられているが、秋芳洞とその台上部は、既に述べた観光集落の存在もあわせて、観光開発は限界に達したというべき状態にある。伝統の「山焼き」も、今は観光上の春を呼ぶ行事の形で行われている。また、著名となった秋吉台は、地上・地下の奇異な地形と風景が、小説の舞台となったり、映画や放送のロケーションの場となることも多い。<sup>9)</sup> 開発利用は奥秋吉台においても盛んで、真名ヶ岳に'73年「山口県少年自然の家」ができ、優れた自然環境が教育的に生かされているが、既にして自然保全の面で問題が生じている。さらに日本カルストの貴重品佐山ポリエの一角に、近年民間の「秋吉台サファリーランド」が造られ、自然保全との関連で、最初から多くの問題を潜在させている。

要するに、この文化的適応として取り上げた秋吉台自然の、学術的・観光的・教育的などの利用は、ある程度の破壊と添加と汚染を伴うのは必然で、他の産業開発と併せて、自然の利用と保全が調整されねばならない。

## V おわりに

秋吉台と人間の結びつきの大要を、その上限である無土器文化時代——旧石器時代から現代まで通覧してきた。秋吉台は、縄文時代を中心とする原始的な

---

9) 例えば、朝日新聞連載の橋本忍『悪の紋章』の「秋吉台」1—8の項(1963年4月)などは舞台としてのカルスト地形を巧みに利用し表現している。またNHKの連続ラジオドラマ「秋芳洞寿円禪師物語」菊田一夫作(1951年6月)も全国で中継放送された。

1982年6月 浜田清吉：秋吉台における人文生態の推移

狩猟生活時代には、低地に先んじた生活舞台であった。しかし、弥生時代以降低平地主体の稲作農耕時代になってからは、無居住にちかい周辺地域として、鉱石や草木を提供し、窯畑を許容したにすぎない。そうして、20世紀以降、とくに戦後の経済発展に伴い、農耕は衰え、石灰石の採掘と観光が飛躍的に強大となり、顕著な破壊と変容が行われ、学術的・文化財的側面からの保全とつよく競合するようになった。

秋吉台に固有の地質・地形・水理・生物等の特異性ゆえに、各時代における住民の適応もまた、それぞれ特色のあったことを、概略かつ不十分ながら歴史的にたどってきた。ただ近世以降は、時代区分によらず、歴史的現実としての現代に視座をおいた上で、農業的・鉱業的・社会的および文化的適応という四分野に分けて論述することを試みた。しかしそれも、おもな事象の概要を取り上げるにとどまったので、筋書きに終り、論議もたらないものとなった。考古学や歴史学の専門家による秋吉台人文史の精細な研究を期待してやまない。

(1982. 3. 3)

CHANGES OF HUMAN ECOLOGY IN THE  
AKIYOSHI PLATEAU, WESTERN JAPAN

Seikichi HAMADA

Akiyoshi Plateau is the largest limestone plateau in Japan. There exhibits karst landforms of Japanese type which consist of complex underground drainages and almost 270 limestone caves. This peculiar natural region had been appeared as the arena of human life environment since late period of palaeolithic age (nonselamic age). When the time was neolithic age (Jomon age), the region was known to become a central area of this locality, which was evidenced by discovery of various sites. After Yayoi age of a full Ricecrop life time, the region had been used as human life environment from time to time and then changed into non-dwelling area. Thereupon the region was functioned as the area for mining of minerals, collecting plants and cultivation of its doline. For some period, the area was used for the purpose of military maneuvers. In the twentieth century, Akiyoshi Plateau has become famous for studies of geology, geomorphology, biology (paleo-biology), anthropology, archaeology and speleology. Since Eastern Akiyoshi Plateau, which was specified for special natural monument because of its high scientific valueness, enjoys excellent karst landscape, it was also named for a quasi national park and situated as a scientific tourist resort. On the contrary, Western Akiyoshi Plateau has been industrially developed primarily as the area for mining of limestones, marbles and for stock farms, hence the adjustment of utilization and conservation of nature is presented as an important current subject.